

# Bluff Archives Monthly News

2019年10月

発行 NPO 法人横浜山手アーカイブス

## 「山手 111 番館」の住民たち

旧ラフィン邸として現存する「山手 111 番館」は、1926年にJ.H.モーガンの設計によってアメリカ人 T.M.ラフィンの長男ジョン・エドワード・ラフィンの自邸として建てられた。

創建当初は、ジョンが暮らしていた。横浜市電話帳には、

**1927年 ジョン、イー、ラフィン 山手一一一乙**

**1933～39年ラフィン、ジョン、イー 中、山手一一一**

**1942年 コップ、ベンジャミン 中、山手、一一一**

と記載がある。一方、土地台帳と家屋登記簿によると、1942年からの土地と建物の所有者はマリア夫人である。戦中日本にいなかったジョンは、戦後横浜に戻り、1963年、横浜に貢献した功績で横浜文化賞を受賞する。

建物が残った 111 番館は、近年関係者が来館し、暮らしの記録が里帰りする機会に恵まれた。この建物での、その後の暮らしを紹介したい。

ヴィルツ一家は 1941年～44年まで 3年間、山手 111 番館をドイツ大使館から無料リースして暮らしていた。

父ヨーゼフ・ヴィルツはドイツ大使館の医務官として、ドイツ社会の医務に携わっていた。母はエディス、長女ローラ（1937年生まれ）は横浜の小学校に通ったという。次女アンティエ（1941年10月1日、山手 111 番館にて誕生）は現オーストラリア在住で、2019年、111 館で暮らした時の写真アルバムを横浜市に寄贈、そのアルバムの写真はモノクロ写真に着色をした彩色写真である。

フェーセル一家は 1959年から 1965年頃、モービル石油勤務の父、母、息子 2人、娘の 5人家族で暮らしていた。来館時に当時のモノクロ写真を数枚をご提供いただいた。

バークレイ一家は、1964～66年、会社の借り上げ社宅としてモービル石油勤務の父、母、長男、次男、長女の 5人と犬一匹で暮らした。雇い人としてコック、ナニー（子どもの養育係）、メイドがいた。来館時には、当時の写真を多



ヴィルツ家アルバムより居間（山手 111 番館保管）



山手 111 番館居間 ©デビッド・フェーセル

数ご提供いただいた。（居住年、会社名は聞き取りによる）

1948年から 1951年は、占領軍内線電話帳に住民が記載され、その後の横浜市電話帳には次の記載がある。

**1953年 サウスウェル、シー、ジェー 中、山手一一一**

**1957～61年 スタンダート、パキューム、オイルカンパニー、外人住宅 中、山手、一一一**

**1962～66年 モービル石油、外人住宅 中、山手一一一**  
そして 1967年、山手 111 番館は売却される。（W）

<参考文献>

「山手 111 番館（旧ラフィン邸）について」館内展示パネル  
「Telephone Directory, Yokohama area Mar, 1947」

国立国会図書館憲政資料室所蔵 ほか